



◎旧制矢掛中学校として開校し、創立110周年を迎える伝統校。2004年度、岡山県立矢掛商業高校と再編整備され、現在の形となった。11年度に「地域ビジネス科」を新設。普通科は「探究」「総合」の2コースがある。校訓は「至誠力行」。

設立

1902(明治35)年

形態

全日制・単位制(11年度2年生まで)・学年制(11年度1年生から)／普通科・地域ビジネス科／共学

生徒数

1学年約160人

11年度入試合格実績(現浪計)

国公立は、岡山大、香川大、鳥取大、島根大、山口大、岡山県立大、福山市立大などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、ノートルダム清心女子大、岡山理科大などに延べ74人が合格。

住所

〒714-1201
岡山県小田郡矢掛町矢掛1776-2

電話

0866-82-0045

Web Site

<http://www.yakage.okayama-c.ed.jp/>

岡山県立
矢掛高校

学校改革

生徒・教師の意識を改革 「やかげ学」を軸に 学校の特徴化を図る

変革のステップ

背景

◎再編整備に伴って多様な意識の生徒が混在。学校目標の不明瞭さなどから、地域からの生徒の流出が顕著に

実践

◎進路別に3つの科・コースを設置し、「やかげ学」などの改革を断行。教師全員で学校目標を考えるなど意識改革にも着手

成果

◎生徒に学習意欲の高まりやマナーの向上が見られ、教師の意識も変わる。地域との連携も深まる

再編後、学校目標のあいまいさから
地域からの信頼が低下

岡山県立矢掛高校のこの数年間は、新しい学校に生まれ変わるために次々と改革を行い、もがいた時期だった。その端緒は、2004年度に岡山県立矢掛商業高校と統合し、新しい矢掛高校が誕生したことにあった。

同校は岡山県西部の中山間地域に位置し、高齢化や過疎化といった課題を抱える地域にある。旧矢掛商業高校は定員を満たしていたが、旧矢掛高校は再編までの過去5年ほどは定員割れが続いていた。03年4月に教育委員会と両校の教師から成る「開校準備委員会」が発足。普通科と商業科をそのまま残すのか、単位制高校とするのかなど検討を重ねた結果、1学年5学級の単位制普通科高校として再出発することになった。3年前に赴任した教務課長の石田桂子先生は、当時の様子を次のように聞いたと話す。

「再編当時、本校には国公立大志望から就職希望まで、さまざまな進路希望を持つ生徒が各クラスに混在していました。学校として目指す生徒像は何か、どの学力層に焦点を当てて授業をすれば良いのか、校内の共通理解を図るのが難しかったようです」

学校目標が明確でない上に、再編後、生徒の目的意識の欠如や学習意欲の低下が見られ、学力の高い地元の中学生は町外の進学校を選ぶよ

うになった。

しかし、国公立大合格者数は再編前と変わらない15〜20人を維持しており、特に日常の授業が成立しないような荒れた状態に陥っていたわけではなかった。一部の生徒の行動によって、地域の間で悪いイメージが先行してしまったのだ。



岡山県立矢掛高校教頭
森本裕文 Morimoto Hirofumi
同校に赴任して3年目。「可能性を信じて『鉄は熱いうちに打て』」



岡山県立矢掛高校
石田桂子 Ishida Keiko
同校に赴任して3年目。教務課長。「かけがえない命を大切にし、『自立・自律』が出来るようになり合っていきたい」



岡山県立矢掛高校
濱田好宏 Hamada Yoshihiro
同校に赴任して4年目。総務課長、総合コース主任。「教師は偉大なる『馬鹿』になれ」



岡山県立矢掛高校
加本英人 Kamoto Hideto
同校に赴任して1年目。進路課長。「何事も『諦めない』こと」



岡山県立矢掛高校
室貴由輝 Muro Takayuki
同校に赴任して6年目。環境科主任、生徒課、「持続発展教育」で全ての学びがつながることを、生徒に実感させたい」

「探究」「総合」「ビジネス」の3コース制を導入

地域からの信頼を取り戻すため、同校は改革に着手した。まず、学びの目標を分かりやすくして特色を打ち出そうと、09年度に「探究」「総合」「ビジネス」の3コース制を導入した。しかし、当時を知る濱田好宏先生は、中学校や塾へのコース説明は苦戦の連続だったと話す。

「中学校や塾の先生、保護者からは『探究コースが目指すのは、国公立大の一般入試か、それとも推薦入試か』と問われました。いずれは一般入試に対応できる学力を付けるコースにしたいと考えていましたが、当時はAO入試や推薦入試で合格する生徒が多く、どう説明すべきか迷いました。また、総合コースは当初、就職に対応すると説明していましたが、次年度には『就職を目指すならビジネスコース』と説明するような状況でした。教育目標が定まらず、各コースの特徴が明確でないまま、生徒募集をしている状況でした」

こうした試行錯誤を経て、10年度には、国立大進学を目指す「探究コース」、進学を柱に幅広い進路に対応する「総合コース」、資格取得から進路を開拓する「ビジネスコース」という特色を明示した。しかし、特色が分かりやすく、生徒に目的意識を持たせやすい探究とビジネスの両コースに比べ、総合コースは依然とし

て目標が分かりにくいものだった。その結果、高校入学時に進路目標が明確でない生徒は総合コースに集まってしまい、その生徒たちの学習意欲を高めることが大きな課題となっていた。

「やかげ学」で生徒の意欲を高め地域の活性化も図る

そうした折、室貴由輝先生が中心となって実施していた学校設定教科「環境」の中から、地域連携やボランティア活動に関する部分を発展させた「やかげ学」を考案し、実現に向けて動くことになった。

「当時、探究コースは進路課、ビジネスコースは商業科の教師が中心となり、進路指導を行っていました。目的意識が希薄な生徒の多い総合コースは、私の所属する生徒課が中心となり計画を立てていました。生徒に目的意識を持たせ、規律ある学校生活を送らせるにはどうしたら良いかと考えた結果、自分たちの学校のある町のことを知り、学校外の人と触れ合うことで、生徒は変われるのではないかと考えました。町の規模はそれほど大きくなく、学校から近い所に生徒を受け入れてくれそうな施設がいくつかありました。町外からの通学者が半数を占めることもあり、矢掛町のことを勉強しながら将来を考えていく機会にしたいと思ったのです」（室先生）

「やかげ学」は総合コースの学校設定教科として設け、生徒が地域の幼稚園や小学校、高齢者施設、農業体験施設などで活動することを柱とする内容とした。教師が手分けをしてさまざまな施設を訪れてほしいし、十数か所から受け入れの承諾を得た。同校が念を押したのは「インターンシップのように一時的に仕事をするのはなく、『職員』として長期間、生徒に仕事を任せてほしい」ということだ。

「インターンシップは生徒に仕事内容を理解させるのが目的の一つです。生徒にとっっては社会や仕事を知る機会となりますが、受け入れ側は担当者が終始付き添うことになり、仕事が出来ません。長期的に継続するために、先方の負担軽減となるよう、生徒に仕事を任せてほしいと頼んだのです」（室先生）

「やかげ学」が可能となったのは、教育委員会だけでなく、町の協力も大きい。周辺の自治体が相次いで合併する中、矢掛町は合併しない道を選んだ。定住化政策を進め、人口減に歯止めをかける上で、町内に高校が存在する意味は大きく、町として支援するという意図があった。

「やかげ学」の成功を生徒の学習意欲や学力にどうつなげるか

「やかげ学」は2・3年生の2年間で行う。毎週1回2時間の授業で、2年生1学期は矢掛町

を知ることと実習に向けたガイダンス、2年生の9月から3年生7月にかけて実習（図）、9月から報告書作成などのまとめの作業に入る。実習先は、2年生1学期の「やかげ学」の定期考查の結果を考慮して決める。

「実習先と定期考查の結果を関連付けているのは、社会では努力して成果を出さないと認めてもらえないことを伝えるためです。『やかげ学』の定期考查は、授業を真面目に聞き、ノートを取っていれば分かる問題ばかりです。教科の学力は振るわなくても、『やかげ学』の成績は良く、希望した実習先でも生き生きと活動している生徒もいます」（室先生）

受け入れ先での生徒たちの評価は、予想以上に高かった。幼稚園からは「子どもの昼寝を見てもらう間に、職員会議を開けるようになった」、特別支援学級からは「子どもと一緒に遊んでくれて、教師の体力的な負担軽減になった」といった声が寄せられた。初年度を終え、「次

図 「やかげ学」の活動報告書

やかげ学 活動報告書			
活動日	月 日 本曜日	活動時間	13時00分～15時45分
活動施設名	ちかっま荘	施設担当者	
報告者名	年 組 番 氏名		
本時の活動目標 自分から進んで学びたい			
本時の活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・洗面所掃除 ・ゴミ物の分別 ・机の拭き掃除 ・机の消毒 ・机の整理 ・机の掃除 			
自己評価 よくできた…3 できた…2 あまりできなかった…1 できなかった…0			
1. 本時の目標を達成する	3	2. 時間を守って活動する	3
3. 積極的に活動に取り組む	2	4. きまりやマナーを守って活動する	3
5. 必要に応じて報告・連絡・相談を行う	3	6. 活動の質を高める工夫をする	2
7. 場面に応じた挨拶をする	2	8. 相手の立場や考え方を理解する	2
9. 立場に応じた接し方を考える	2	10. 自分の考えや意見を正確に伝える	2
		合計	24/30
物に頑張ったこと <p>深い物と浅い物とを分けて洗った。自分から進んで洗った。深い物のよじれは拭き取った。浅い物のよじれは拭き取った。また、服を畳む手伝った。お茶作りなど今日は頑張った。時間いっぱいまで頑張りました。この調子で目標の力になれるかなと感じました。★</p>			
反省事項 <p>作業終了後、ゴミを捨てた。ゴミ箱を溢らしてしまいました。ゴミ箱の蓋も開けず、ゴミを捨てた。反省点でした。僕はリーダーなので一番しかりしていなければならぬので、次回は注意をし、かりて行くことにします。★</p>			

「やかげ学」の活動後には、活動報告書を提出する。活動を振り返って次につなげるだけでなく、文章力や表現力を高めるためでもある
*学校資料をそのまま掲載

年度は人数を増やしてほしい」という要望が受け入れ先から上がってきたほどだ。

「生徒は受け入れ先で感謝されることで、自己肯定感が高まっているようです。学校外で人とかがわることで、社会性やコミュニケーション能力も身に付いたと感じています。更に、受け入れ施設と生徒の相互にメリットがあるようにという目標は、1年目で達成できました」（濱田先生）

同校では実習の際、「やかげ学モード」と言われるほど、生徒の心にスイッチが入る。しかし、普段の授業では必ずしもそうではないことが課題だと、室先生は言う。

「『やかげ学』ではマナーや身だしなみがき

ちんとしているのに校内では出来なかったり、『やかげ学』ほど通常の授業に意欲的になれなかったりする生徒が目立ちます。『やかげ学』での成果が学力や学習意欲につながっていない生徒もいるのです。中には幼稚園や小学校での実習を通し、『将来は幼児教育の道に進みたい』と目的意識を持ち、学習意欲につながっている生徒もいますが、まだ少数です。学習でも生活指導でも生徒にもう少し負荷をかけることで、もっと力を引き出せるのではないかと感じています」

また、教師の異動があっても「やかげ学」を継続できる仕組みづくりも今後の課題だ。それを見越して、実習期間が9月から翌年7月までと年度をまたぐような工夫もしている。

「『やかげ学』のシステムは出来上がりつつあります。システムを形骸化させないためにも、多くの教師が『やかげ学』の意義を理解し、取り組みに思いを込めていくことが必要だと感じています」（石田先生）

チームとして 危機に立ち向かう意識改革

「やかげ学」の成功について、森本裕文教頭は次のように話す。

「『やかげ学』を始めた課題意識は、総合コースだけでなく学校全体が抱えるものです。

学校を変えるには、まず教師が危機感を共有しなければなりません。しかし、毎年、異動のある教師集団に共通の当事者意識を持たせるのは難しいのが現状です。危機感を共有するために、目標を皆でつくり、達成のための手立てを皆で考え、『考えるチーム』をつくりたいと思います」

同校はSWOT分析を用いて、学校の強み（S）、校内の弱み（W）、校外の機会（O）、校外の脅威（T）を洗い出した。その上で重点目標に「学力向上への組織的取り組みを継続できる学校」を掲げた。11年度当初には、その目標を各課、各学年、各教科の目標、更には自己目標シートに落とし込んだ。現状のチェックから始めたこの取り組みを「CAPD」サイクルで回していく考えた。加えて、授業改革にも取り組む。

「以前は、他教科や他学年がどのような内容、進度、深さで授業を進めているか、教師間の共有が弱かったようです。研究授業を行いながら、こうした情報を各教科で共有する時間を取ってもらっています」（石田先生）

取り組みを始めて間もないが、職員室での会話の中心は少しずつ変わってきたという。

「課題の量や未提出者への対応についての話題が増えてきました」（森本教頭）

今後は、国公立大合格実績の向上を目指したと加本英人先生は話す。

「国公立大の合格実績は地域からの評価を

得るための重要な要素で、目安は1学年2割と考えています。探究コースでは、入学時から学習習慣の確立に力を入れ、学習合宿や個別面談などで生徒一人ひとりにきめ細かな指導を徹底していますが、今後はそれだけでなく、総合コースの進学実績を上げる工夫が必要で、進路目標を達成し、地域から信頼される高校として踏ん張っていくのが、私たちの使命だと思っています」

一方、目標が明確であるビジネスコースにも、課題が浮上していた。商業科目の選択者数が年度によって十数人から50人以上と大きく変動する点だ。また、普通科の中にあるビジネスコースでは特色を十分に生かせないため、11年度、「地域ビジネス科」に独立させた。

「ビジネスコースは11年度のコース制完成後に改組すべきという考えもありましたが、改革の歩みを止めるべきではないと考え、新学科設置に踏み切りました」（森本教頭）

再編整備から8年経った。旧矢掛商業高校の最後の3年生が卒業したのは06年3月。その学年主任を務めていたのが室先生だった。

「学校を閉じることがあれば寂しいことだとは思いませんでした。あのようないは二度と繰り返したくありません」（室先生）

旧矢掛商業高校の卒業生や教師たち、そして町の思いも背負い、全国の中山間地域が抱える課題にこれからも立ち向かい続けていく。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年2月号指導変革の軌跡「熊本県立高森高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)